様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：８２７０５
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｈ０３５１７

研究課題名（和文）通常学級における協同的でユニバーサルデザインな授業実践の開発

研究課題名（英文）The development of cooperative universal design teaching method in the regular classroom

研究代表者
涌井　恵（Wakui, Megumi）

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所・インクルーシブ教育システム推進センター・主任研究員

研究者番号：８０３３２１７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,200,000円

研究成果の概要（和文）：　発達障害児は、学習の困難のみならず社会性や仲間関係に課題を抱えているが、通常学級での指導に関する研究は依然として遅れている。「学び方を学ぶ」学習と協同学習を組み合わせることで、発達障害の多様な認知特性にも、他の典型発達児の学習内容にも対応したユニバーサルデザインな指導方法を開発できたが、より効果を上げるためには、学校全体で取り組むことの有用性が指摘されていた。
　そこで、本研究では教員研修や実践を学校全体や家庭学習へ拡げるための諸資料・教材の開発を行った。その結果、総合的な学習を核とした「学び方を学ぶ」学習の全校プログラムや、校内研修教材、実践スタートキットを開発することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、先行研究を発展させ、実践を一教員だけでなく、全校へ拡げていくための手がかりとなる指導資料や教材を開発することができた。本研究で開発した、総合的な学習を核とした「学び方を学ぶ」学習の全校プログラムは、2020年から完全実施される学習指導要領において指摘されている育成を目指す資質・能力をまさに育成する内容となっており、今後の教育実践に役立つ社会的意義の高い内容となっている。

研究成果の概要（英文）：Although children with developmental disabilities have problems with not only learning difficulties but also with sociality and peer relationships, research on teaching in regular classes is still delayed. Combining "learning how to learn" learning with cooperative learning made teachers do universal designed instruction that corresponds to the various cognitive characteristics of developmental disorders as well as the learning content of other typical developmental children. Furthermore, school-wide efforts may be useful.
This study aimed to develop a teacher training program, various materials, and teaching materials to carry out learning strategy learning throughout the school and at home.
As a result, a whole-school program for "learn how to learn" learning centered on integrated learning, in-service teacher training materials, and Practice Start Kit(PSK) was completed.

研究分野：特別支援教育　教育心理学　発達臨床心理学　障害児心理学

キーワード：発達障害　協同学習　ユニバーサルデザイン　多重知能　自己調整　学び方を学ぶ　通常学級　学び合い

１．研究開始当初の背景

文部科学省の 2012 年の調査では，LD（学習障害）や ADHD（注意欠陥多動性障害），高機能自閉症等の発達障害の可能性がある特別な教育的支援を必要する児童生徒は 6.5%の割合で，すなわち 40 人規模の通常学級に約 2 名または 3 名程度の割合で在籍していることが明らかになっている。発達障害のある子どもの中には，学習上の困難に加えて，社会的スキルが未熟であるために仲間関係に困難を抱え，それにより仲間との肯定的な関係を持つ機会がさらに阻害されるという悪循環に陥っている者も多い。これを未然に防ぎ，発達支援するために，学習指導と共に社会的スキルや仲間関係の促進・調整のための介入の両方が必要となる。

そこで，先行研究［平成 24-26 年度文部科学省科学研究費若手研究（B）「発達障害児と共に学ぶ通常学級の学び方を学ぶ学習と協同学習を組合わせた指導の開発」（研究代表者：涌井恵，課題番号 24730774）］では「学び方を学ぶ」学習と協同学習を組み合わせることで，発達障害の多様な認知特性にも，他の典型発達児の学習内容にも対応し，学級内の対人関係を促進するユニバーサルデザインな指導方法を開発した。研究が深化するにつれ，学校全体で取り組むことの有用性が見えてきた。

しかしながら，「学び方を学ぶ」ことや協同学習に馴染みのない教員が実践する場合の教員研修や，実践を学校全体や家庭学習へ拡げるための教材開発が課題として残された。

２．研究の目的

そこで，本研究では，当初，発達障害のある子どもも共に学ぶ通常学級において，全ての子どもの学力向上を実現するために，「学び方を学ぶ」学習と協同学習の組み合わせによる指導実践を学校全体へ拡げるための手法の開発（研究 A），実践スタートキットを作成し（研究 B），さらに「学び方を学ぶ」学習の充実・定着のための家庭学習用アプリケーション等の教材の開発（研究 C）を行うことを目的とした。

３．研究の方法

（1）　研究 A　指導実践を学校全体へ拡げるための手法の開発

地方自治体または民間教育団体主催の教員研修会や，校内研修会において，研修講義を行い，アンケート結果や受講中の発言等の質的データから改良点について分析し，研修の構成や内容の再検討を行った。これらの結果を反映させた校内研修用の研修教材のセットの試作案を作成した。

（2）　研究 B　実践スタートキットの作成

まず，研究協力者の学級（小学校の通常学級）において，複数の教科において「学び方を学ぶ」学習と協同学習を組み合わせた授業実践と実践データの分析を行い，効果的な内容について，指導の具体例がわかるようなガイド的な資料の作成を行った。これらの資料を集めた「実践スタートキット」の作成を行った。

また，研究協力校において，「学び方を学ぶ」学習を小学 1，2 年生は学級活動や各教科に，小学 3 年生以上は総合的な学習に位置づけ，学校全体の指導計画と指導略案集の作成を行った。

実践毎に，指導の効果や課題について分析し，改良点について探った。

（3）　研究 C　「学び方を学ぶ」学習の充実・定着のための家庭学習用アプリケーション等

の教材の開発

「学び方を学ぶ」学習に含まれる「やる気」,「記憶」,「注意」の能力を向上させることを目的とした，タブレット端末用のアプリケーションの試作を行った。また，小学生版を中高生版にアレンジした「学び方を学ぶ」テキストの作成と電子書籍化を行った。さらに,「学び方を学ぶ」学習で学んだ学習方略を家庭学習において活用することをねらいとした実践研究を行い，家庭と連携した実践の可能性を探った。

４．研究成果

（1） 研究 A　指導実践を学校全体へ拡げるための手法の開発

地方自治体または民間教育団体主催の教員研修会のアンケートでは,「学び方を学ぶ」学習と協同学習の組み合わせによる指導実践をやってみたいという回答があったが，全校での取り組みにまでつながる事例はなかった。全校の取り組みとするためには，管理職の判断が必要であるから，管理職をターゲットにした理解啓発が必要であることが指摘できる。

一方，校内での研修に関しては，年度当初の実施を想定した 60～90 分程度の研修ワークショッププログラムと教材を開発した。模擬授業を通じて生徒役を体験することが，指導手法の意味や子どもの反応への感受性が高まるといった意見が受講者より出された。

（2） 研究 B　実践スタートキットの作成

まず，研究協力者の学級（小学校の通常学級）において，複数の教科において「学び方を学ぶ」学習と協同学習を組み合わせた授業実践と実践データの分析を行い，効果的な内容について検討を行った。新たに小学 2 年生のかけ算の実践事例や，小学 1，2 年生の国語の物語文と説明文の実践事例を収集することができた。これらの実践事例を素材として，指導の具体例がわかるようなガイド的な資料の作成を行った。これらの資料や授業のユニバーサルデザイン・チェックリストを集めた「実践スタートキット」を作成することができた。

また，研究協力校において「学び方を学ぶ」学習を小学 1，2 年生は学級活動や各教科に，小学 3 年生以上は総合的な学習に位置づけ，学校全体の指導計画と指導略案集の作成を行った。

3 年間かけて，毎実践毎に，指導の効果や課題について分析したところ，学年間で内容に重なりがあった。「やる気」,「記憶」,「注意」に関係する学習内容については毎年行うこととし，同じ活動を各学年に渡って繰り返しても効果的であるもの，学年進行に応じてレベルアップした内容とするものに分けて，配列を組み替えた。指導略案のみでは，次の授業者に内容が上手く伝わらないことが明らかになったため，授業風景の写真や教材の写真等も資料として指導略案集に付加した。以上のような改良を加え「学び方を学ぶ」学習の全校プログラム（試作版）を完成させることができた。

「学び方を学ぶ」学習の全校プログラムが総合的な学習の指導内容として位置づくことは,「学び方を学ぶ」学習と協同学習の組み合わせによる指導実践を全校に拡げる手立てとして意味づけることもできる。今後，他事例において，全校への波及効果等を検証していく必要がある。

（3） 研究 C「学び方を学ぶ」学習の充実・定着のための家庭学習用アプリケーション等の教材の開発

「学び方を学ぶ」学習に含まれる「やる気」,「記憶」,「注意」の能力を向上させることを目

的とした，Android タブレット端末用のアプリケーションの試作品を完成できた。しかしながら，機種によって，画像の崩れがあったり，色調が異なったりした。これらの調整や OS のアップデートへの対応など維持管理のコストが大きいことが明らかになった。また，家庭によってタブレットの所有の有無が異なるといった実施上の課題も明らかになった。

そこで，「学び方を学ぶ」学習の充実・定着のための家庭学習について，プリントや家にあるもので賄える手法に関する事例検討を行った。小学 1 年生のある学級を対象に，漢字練習に関する家庭学習について研究を実施したところ，漢字テストの成績がクラスの 9 割以上の子どもで改善が見られた。ある子どもが考えた学び方（練習方法）がクラス全体に広まっていくことも見られた。実践後の保護者アンケート結果には，「うちの子の場合，書くだけの方法では，続けることができなかったと思うが，自分なりの方法で練習することができてよかった」という回答や「自分（保護者）が良いと思うやり方をやらせてしまったりした」という回答があった。以上の結果から，小学 1 年生という低学年においても，「学び方を学ぶ」学習を活用した家庭学習が実施可能であること，その効果があることが明らかになった。また，保護者に学び方の多様性の理解と柔軟な実施をより促すような介入が，実践途中に必要である可能性が示唆された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

1. 齋藤勝巳・原田浩司・涌井恵（2018）個のニーズに応じた全校支援体制と学校改善 −チーム支援と同僚性の視点から−. 宇都宮大学教育学部教育実践紀要，5巻，pp. 581-586.（査読有り）
2. 原田浩司・伊藤昌夫（2017）個のニーズに応じた学習支援の在り方−小学校における組織的支援の生成−. 宇都宮大学教育学部教育実践紀要，3巻，pp. 545-550.（査読有り）
3. 久武孝弘・涌井恵（2016）学び合いと学び方を学ぶ学習を組み合わせた小学校図画工作科の実践−言葉に頼らない絵画鑑賞−（特集 発達障害教育分野におけるアクティブ・ラーニングへの期待）. LD研究，25（4），pp. 438-447.（依頼論文）（査読無し）
4. 涌井恵（2016）発達障害教育分野におけるアクティブ・ラーニングへの期待と今後の課題. LD研究，25（4），pp.398-405.（依頼論文）（査読無し）
5. 涌井恵（2016）通常の学級における特別支援教育実践－ユニバーサルデザインな学級づくり、授業づくり、自分づくり－. 発達障害研究，38（1），pp. 381-390.（※招待講演を論文化したもの）（査読無し）

〔学会発表〕（計 7 件）

1. Wakui, M.（2019）Qualitative research of collaborative learning with the self-selected learning strategy for diverse learners in a regular class. Cooperative Learning in Far-East Asia and the World: Achieving and Sustaining Excellence Taipei，Taiwan，R.O.C. : 22-24 March 2019，口頭発表
2. 畑中由美子・涌井恵（2019）保護者と連携した宿題の取り組み−自分で学び方を工夫する力を身につけるために−. 日本 LD 学会第 2 回研究集会（東京），ポスター発表
3. 原田浩司・齋藤勝巳・涌井恵（2018）客観的アセスメントに基づいた三層の学校支援システムの構築−個のニーズの把握とマルチ知能等を活用した学び方を選べる授業実践から−. 日本 LD 学会第 27 回大会（新潟），ポスター発表
4. 畑中由美子・涌井恵（2017）マルチ知能を活用した通常の学級における「かけざん（第 2 学年）」の実践. 日本 LD 学会第 26 回大会（栃木）論文集，ポスター発表
5. Wakui, M.（2017）A Case Study of Differentiating Instruction for Mathematics Using Multiple Intelligences for Diverse Learners in Regular Classroom. World Congress on Special Needs

Education（WCSNE-2017），December 11-14，2017，Abstract ID : 32　[Cambridge，UK]，口頭発表

6. 涌井恵（2017）多様な子どもに合わせた指導−一人ひとりの違いを力に変える学び方・教え方−. 授業 UD 学会全国大会第 3 回大会，招待講演
7. 園田雅代・原田浩司（2017）大会実行委員会企画プログラム「アサーションスキルと学級経営」，日本 LD 学会第 26 回大会（栃木），対談

〔図書〕（計 1 件）

1. 原田浩司（2017）「学習指導要領改訂のポイント」明治図書，総頁 117

〔その他〕

ホームページ等

民間雑誌

1. 原田浩司「『チームとしての学校』による特別支援教育の充実」，総合教育技術，2 月号，小学館，pp.32-35，2018 年 2 月
2. 原田浩司「校内の特別支援教育体制向上のための校長としてのリーダーシップの発揮」，特別支援教育研究，723 巻，東洋館出版社，pp.7-11，2017 年 11 月.

６．研究組織

（1）研究分担者

研究分担者氏名：原田　浩司

ローマ字氏名：（HARADA，Koji）

所属研究機関名：宇都宮大学

部局名：教育学部

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：40738168

※科研費による研究は，研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため，研究の実施や研究成果の公表等については，国の要請等に基づくものではなく，その研究成果に関する見解や責任は，研究者個人に帰属されます。